

ス道雪ハ早業ノ達者ナレバ、側ニ置タリケル、千鳥ト云ル刀ヲ取テ飛カ、リ、雷ト覺シキ者ヲ拔打ニ、丁ト切テ飛去ケリ、形ハ何カハ不分明、手當シテ覺ケルガ、刀ノ雷ニ當リタル驗ノ有ケルニ、ズ、實ニ雷ヲ切タリトハ知ラレケル、ソレヨリシテ、此刀ヲ雷切ト改名ス、サレ共道雪モ雷ノ餘焰ニ中ラレテ、身體此彼所損ゼラレ、片輪者ニナラレニケリ、○又見大友興廢記六
〔武邊咄聞書四〕一上杉謙信の太刀に、赤小豆粥略註竹股兼光、谷切來國俊と云て三腰有り、竹股兼光は、元來越後老津之百姓是を持、山中を通りけるに、雷頻に鳴か、りしかば、百姓は刀を抜切先を頭上にさし上、目をふさぎ居たり、暫して天晴しかば、彼刀を見るに、切先一尺計血に成り、百姓の頭も衣も血か、りて有、雷落懸り此刃に當りて、又天へ上りしに無疑と云共、右之血如何成故にや、

〔鹿苑日録〕慶長八年二月廿三日、自朝晴天、未刻ニ俄ニ雨降、疾雷動乾坤、三郎衛門來、向予曰、只今雷落地、西之京路ニテ取人ト云々、於途中傾笠耕田者也ト云々、頭上笠雷火ニテ燃ト云々、不堪驚愕、雨亦頃刻止、當年初而雷也、

〔岩淵夜話別集六〕一或時駿府にて夏の空俄に曇り、夕立おびた、しく、雷の聲頻なる折節、家康公御伽衆へ被仰けるは、万事に用心のなきといふ事なし、地震杯は如形急なる物なれども、是以て家作りの仕様もあり、或は家居の所々、能退場を兼て拵置ば、其難を遁るゝ道理也、此雷といふもの計は、何方へ落來るべきとも不計、其上眞直に計落ることなし、筋違にもおち下る事あり、何として防ぎ逃べき、然共此神鳴逆も、用心なきにあらず、各合點かと被仰、御伽衆承り、只今の上意の如く、雷計は用心の仕様も無之奉、存候と申上る、家康公仰けるは、用心の仕様あり、各に教ん、たとへば其身大身にて、居宅も廣く間敷も有之て、住居する時は云に不及、たとへいか様に淺間しき小家に住居する者なりとも、今日の如く、強く雷のする時は、夫婦、兄弟、爰彼處に可居事、これ大ひ